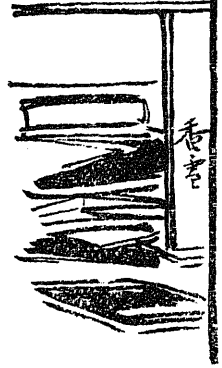


第十卷第九號



如柳子

秋風の賦

如柳子

秋風來る、秋風來る、逞しかりし殘炎の一角、小笹渡るそよとの朝風に類れて、空は青々と澄みながら、自ら清源の氣を吐き來る。單衣の袂朝夕毎に輕きを覺えて路行く人も襟かき合さる。屋角の栴の實漸く肥えて、眞垣の牽牛花日に小さく咲き。過る日の風雨のあと公園の萩に残りて、錦を織りつゝ、も狼藉擦亂たる、却て趣なきにあらす、窓に近き梅と桐、枯枝枯葉を刈り込まれて、硯の塵明かに見ゆるやうになり、流石に我れながら恥かしき顔を池水に寫して、鬢に點々の霜ハツト驚くも今更ながら怪しき程衰へたりな。軒の風鈴切れたる短冊の其の儘に、心にかゝる苦もなきすれんの響を庭の竹に譲りて、誰を憾む方もなく哀れいと深し。人の摺袂應對に扇子半ケチの煩なくなり行くも嬉しく、夕暮のせはしき儘に夜の燈に親しむ頃となりぬること嬉し。

初秋
火老金桑暑光殘

秋聲來處無尋覓

來源正好望南山

只在窓前竹葉間

俞漁溪